

少子社会における養育力と価値観に関する研究(1)

EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) とライフスキル

母子保健研究部 宮原 忍・齋藤幸子
竹井 操 (東京都幼・小・中・高・心性教育研究会)
内山絢子 (目白大学人文学部)
星山佳治 (人間総合科学大学)
近藤洋子 (玉川大学文学部)

要旨: 少子社会における次世代育成力を育む方策を講じることを目的に, E.H.エリクソンによる generativity (生殖性) の考え方をもとに個人の養育力について追究した。本年度はストレス対処能力・対人関係スキルに注目し, 文献研究および調査をおこなった。文献研究の領域は, 1) Sense of Coherence (SOC: 首尾一貫感覚) について, 2) 対人関係スキルについて, 3) 学校におけるライフスキル教育, であった。以上をもとに, SOC13 項目および対人関係スキル9項目の尺度を先行研究の調査項目で使用した EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) 他に加えて, アンケート調査を行った。調査対象は15歳~25歳の男女で, 主な結果は以下の通りである。

1. EPSI 得点と SOC (Sense of Coherence) 得点, および, EPSI 得点と対人関係スキル得点との相関は高く, EPSI の高得点群は, 低得点群に比べ, SOC および対人関係スキルの得点が有意に高かった。
2. EPSI, SOC, 対人関係スキルほぼ加齢に伴い得点が高くなっていた。
3. 20歳以上を対象とした過去の調査結果と同様, 20歳未満においても, EPSI 高得点群は低得点群に比べ次世代を育成しようとする傾向が認められた。

見出し語: generativity, 次世代育成力, EPSI, SOC, 対人関係スキル, ライフスキル教育

Studies on the Nurture and Value in the Low Birthrate Society

Shinobu MIYAHARA, Sachiko SAITO, Misao TAKEI,
Ayako UCHIYAMA, Yoshiharu HOSHIYAMA, Yoko KONDO

With the recent low birthrate in Japan, the smooth succession of generations might be disturbed. While, in the preceding studies, the E.H.Erikson's concept of generativity have been applied to measure the personal ability of nurture and care, this study included SOC (the Sense of Coherence) and a measure of social skill. After the review of literature, a questionnaire was made and the young male and female of 15-25 years of age were surveyed. The results were as follows:

1. The score of EPSI (Erikson Psychosocial Stage Inventory), SOC and the social skill score were highly correlated with each other. EPSI-high group had significantly high scores of SOC as well as the social skills.
2. The scores of EPSI, SOC and the social skill score were, generally speaking, increased with the age.
3. In the younger than 20 people, as the results of the past survey on the older than 20 years, EPSI-high group people were relatively high motivation to nurture their next generation.

Key Words: generativity, nurture, EPSI, SOC, social skill,

I 研究の目的

先行研究「少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究」(平成12~14年度チーム研究・主任研究者 宮原 忍)において、成人を対象としたエリクソン心理社会的段階目録検査(EPSI)による人格の成熟度と、個人の世代継承・再生産について意識や行動との関連を検討し、これらの項目間で正の関連があることを明かにした。すなわち、人格の成熟が次世代を育成しようとする力を生み出すことが示された。また、この次世代育成力を生み出す人格の成熟は、育った家庭および家庭外の人間関係の豊かさに関連しており、人生のどの段階から次世代育成力またはその源となる差異が生じているかを追究するためには、より若い年齢を対象とした調査が必要であると考えられた。

本年の第一の目的は、EPSIおよび次世代育成観に関する10代のデータを収集し、50代までのデータと比較対照することである。

また、EPSI低得点群は、回避型人格傾向が認められ、共感性の低い傾向が認められたことから、ライフスキルの獲得度に注目することとした。第二の目的としては、次世代育成力を高める具体的方策の資とするために、ストレス対処能力・対人関係スキルについて研究調査を行った。

II 研究の方法

1. 文献研究

以下の領域の文献研究を行い前回調査票に新たな項目を加える検討を行った。

- 1) Sense of Coherence (SOC:首尾一貫感覚)について
- 2) 対人関係スキルについて
- 3) 学校におけるライフスキル教育

2. 調査研究

EPSI(エリクソン心理社会的段階目録検査)を中心に次世代育成観および、上記文献研究をもとにSOC縮約版13項目および対人関係スキル9項目の尺度を加えて、アンケート調査を行った。15歳~25歳の男女を対象とした。

III. 結 果

以下の結果では、引用文献は項ごとに記載する。

1. Sense of Coherence (SOC) について

星山 佳治

1) はじめに

現代社会はストレスに満ちているといわれている。したがって、そのストレス処理の成否が後々の人生・

生活に影響することが予測される。このようなストレス対処能力の発展的概念として、近年ヒューマンケアの各分野でSense of Coherence (SOC)が注目されている。SOCは、1970年代後半に医療社会学者のAntonovskyによって体系化された健康生成論の中核概念¹⁻²⁾で、自分の外的・内的環境が予測でき、事態を合理的に期待できるとともに、うまく処理できるといふ確信の持続的感覚の程度を表わす全般的な志向性であるという。また、Antonovskyは、健康と病気は連続しているとする健康-健康破綻の連続体の健康観を提唱し、その軸上において人は常に健康破綻への押し流す力、すなわち多様で偏在的なリスクファクターと遭遇し、自らの位置はこの力と戦って決定づけられるとしている。そしてその位置を維持しようとするか、もしくは位置を向上する見込みのある人をSOCが強いと予想する事を提唱した³⁾。またSOCの強い人の特徴としては、直面するストレスを扱うのに最も適切と思われる特定の対処戦略を選ぶことが挙げられている。つまりSOCは、日常生活上の多様なストレスに対して特定の対処スタイルをもつものではなく、自分の利用できる対処戦略のレパートリーから最も適切なものを柔軟に選び、自分の人生において有意義なものごとの境界を柔軟に変え、直面する問題が秩序立てられ理解されうると柔軟に考えていくという点で志向性と呼べるものである。

2) アントノフスキーの着想⁴⁾

アントノフスキーは、疾病生成モデルの発想では疾病を招く原因に同様に囲まれつつも健康を保つ人々がいることを説明できないと指摘する。この指摘の根底には、健康をもたらす原因に関心をおく次の着想がある。一部の人は、疾病をもたらす得る多様な原因に囲まれていても、比較的健康を維持しやすい。人間には、よい健康状態を維持しようとする本質的な営みがあり、一部の常に健康な人々は、この健康生成の営みが強力なのである。

彼自身は、この着想をユダヤ人女性に関する更年期適応の調査の中で得た。この調査で精神的に健康と見なせる者は、第二次大戦中に強制収容所への収容を免れたグループでは51%、収容を受けたグループでは29%であった。彼は後者の29%という値をむしろ大きく感じ、強制収容を経験したにも関わらず彼女たちが健康でいる理由について考えた。この考えの中で、疾病の原因のみに注目する二分法的な疾病生成モデルの限界を結論し、健康生成の着想を基礎とした健康に関する新たなモデルの構築を試みるに至ったという。

このようにアントノフスキーは、二分法的な健康観に代わるより連続的な健康観を、「特定原因への特定対策の対応付け」に代わる多様な原因に対応する健康維持の方略を、疾病原因への注目に代わる健康を生成するものへの注目を追求した。各コンセプトを統合した「健康生成モデル」(Salutogenic Model)を構築

する中で最も重要であったものが、「健康を維持している一部の人の健康生成の営みとは具体的に何なのか」、「何が人間の健康をつくっているのか」という健康生成の問いであった。彼は、これらの問題の解明をモデル作成上の最重要課題とした。

3) 実証研究について

我が国における SOC の実証研究はまだ始まったばかりである⁵⁻⁶⁾が、WHO のキックブッシュによって、ヘルスプロモーションの基礎理論となりうると評価されており⁷⁾、SOC に関する研究論文は近年急増している。それらによると SOC と QOL との関連やストレスへの緩衝効果が徐々に実証されている⁸⁻⁹⁾が、そのメカニズムにおいては未だ明らかではなく、生理学的・生物学的側面からの研究では、ナチュラルキラー細胞活性との関係による免疫学的側面からの報告⁹⁾が見られるのみである。また大学生における SOC については、ウェルネスとの関係やストレスの知覚との関係に関する実証研究が僅かに報告されているに過ぎない¹¹⁻¹²⁾。

4) SOC スケールの得点

Sense of Coherence ; SOC とは、ストレスに曝されながらも、健康へのダメージを受けないばかりか、時にはストレスを成長の糧にさえしてしまう対処能力を測る尺度として開発されたものである。この点数が高いほど、ストレス対処能力が高いとされる。ただし点数が高すぎるのも問題があると言われている。

5) SOC の強さや変化に関わる「意識と行動」因子

本江らは¹³⁾、看護学生の SOC 得点を実習前と後との2回測定しその変化について研究を行った。その結果、前 SOC が低群から中群、高群へと高くなるに従って、意識と行動の各因子得点が段階的に増加し有意差を認められたのは、「ストレス対処行動」「ポジティブ思考」「達成感」「予測と期待感」の4因子であった。しかしこれらとは逆に段階的に有意に減少した因子は「ストレス感」であったと報告している。また、SOC 変化群が減少から増加へと転じていくに従って、意識と行動の因子得点が段階的に増したものは、「ストレス対処行動」と「ポジティブ行動」、「達成感」の3因子で、「ポジティブ行動」については有意差が認められた。これらとは逆に段階的に減少傾向が認められたのは、「ストレス感」であったとも報告している。さらに、体験学習後の SOC に関連する意識と行動因子を特定するために重回帰分析を行った結果、SOC が高いほど「ストレス対処行動」や「ポジティブ思考」がそれぞれ有意に高かった。一方、体験学習前後の SOC 変化に関連する意識と行動因子については、SOC の変化が増加に転じるほど、「ポジティブ行動」が有意に高いという結果が得られたという。

SOC は遺伝的な生得能力ではなく、むしろ生育過程によって生成する後天的な資質であり¹⁴⁾、成人初期（成人して10年経過する頃まで）でほぼ固定されるといわれている¹⁵⁾。

先の本江らの研究によれば、SOC の変化群別の意識と行動の得点差については、SOC がまだ充分形成されていないと考えられる低群において、SOC が減少するか維持増加するかを分ける要因として、「納得いくまで調べる学習行動」、「目標の達成感」、「選択の妥当性の実感」の3つの意識と行動が明らかとなった。このことは、学生にとって軽すぎず重過ぎない課題に取り組むことができることや、努力の成果が得られること、そして一貫性のある自己に対する肯定的フィードバックが得られることが SOC の変化に関与していることを示唆し、理論上の「一貫性 (consistency)」、「過小負荷と過大負荷のバランス (underload-overload balance)」、「結果形成への参加 (participation in shaping outcome)」によって特徴づけられる良質の人生経験が SOC を形成する¹⁵⁾とされていることを裏づける結果と推察されると述べている。さらに、一方 SOC 中群において、SOC 増加の要因として「納得いくまで調べる学習行動」のみが挙げられたのは、低群のように「目標の到達感」がたとえ得られなくても、自らの学習行動に納得できれば SOC の増加が見込める可能性を示唆するものと考えられる。SOC が既に形成されていると考えられる高群においては、「自ら指導を仰ぐ」、「一生懸命努力した」ことが維持増加に有意に働いていたことから、単に目先の問題への対処に留まらないポジティブな行動の関与が考えられ、強い SOC がもつといわれている強い自己としっかりしたアイデンティティに由来するとも捉えられると考察している。

6) ストレス知覚と SOC

N.Skirka は米国の大学生を対象にした研究結果からストレス知覚と SOC との間に負の相関が認められたことを報告しており¹¹⁾、本江らの研究においても体験前の SOC 高・中・低群による多重比較で同様の結果が得られた。また、体験前の SOC が高いほど、ポジティブ思考が強く、将来の予測と期待感が増し、ストレス処理行動がとれ、達成感も得られるという結果が得られたことは、理論上 SOC の構成要素¹⁶⁾と言われている把握可能感 (comprehensibility)、処理可能感 (manageability)、有意味感 (meaningfulness) を部分的に実証する結果であったと考えられると述べている。

把握可能感とは、自分の内外で生じる環境刺激は秩序づけられた、予測と説明が可能なものであるという確信とされている。また、有意味感については、刺激がもたらす要求は挑戦であり、心身を投入し関わるに値するという確信とされている。

自己に対してポジティブで、ストレスが少ないとい

う SOC の強い人の特性は、何らかの刺激によって緊張状態が生じていてもストレスに転化しにくいことを示唆していると考えられる。つまり、緊張状態がたとえ感情的、認知的レベルであってもストレスとして作用すれば中枢神経系の消耗を避けられず、結果的に病理的变化を引き起こす。しかし、SOC が強ければストレスとして知覚することもなく、病理的变化を回避する可能性をもっていることを示唆するものであろう。また、ストレス対処行動をとり達成感が得られれば、自ずと対処能力に対する自信が生まれ、このことも緊張のストレス転化への回避に加担すると考えられる。

7) SOC を意図的に変化させる方法

アントノフスキーは、SOC は何十年もかけて形づくられ深く根づいた生活世界への志向という現象であるため、容易に変わるものではないとしながらも、SOC を意図的に変化させる方法を提案している¹⁵⁾。それは、人生上のストレスによって請けるダメージの発生が生じないような出会いを築くこと、また逆に SOC を上げるような出会いを築くこと、そして SOC を強める経験と呼ぶものを、その人生の範囲内で探し出す準備をさせ、自分の経験を解釈し直す以上のことを始めさせることだとしている。

文 献

- 1) Aaron Antonovsky : Health, Stress, and Coping ; New Perspective on Mental and Physical Well-being.182-197 , Jossey-Bass Publishers , San Francisco, 1979
- 2) Aaron Antonovsky : Unraveling the Mystery of Health : How People Manage Stress and Stay Well, 15-32, Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1987
- 3) Arron Antonovsky : The Sense of Coherence as a determinant health, 114-129, IN Behavioral health. J. D. Paparazzo (ed.) Wiley, 1984
- 4) <http://www.valdes.titech.ac.jp/~iwai/soc.html>
- 5) 高山智子, 浅野祐子, 山崎喜比古, ほか: ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚 (Sense of Coherence: SOC) と精神健康に及ぼす影響, 日公衛誌, 46 (11), 965-973, 1999
- 6) 小川幸恵, 中村裕之, 長瀬博文, ほか: 生活習慣病危険因子に関わる Health locus of control (HLC), Sense of Coherence (SOC) を中心とした心理社会的因子についての構造的分析, 日衛誌, 55, 597-606, 2001
- 7) I.Kichbusch : "Tribute to Antonovsky : What creates health?". Health Promotion International, 11 (1), 5-6, 1996
- 8) Bonnie B. Nesbitt, Susan M. Heidrich : Sense of Coherence and Illness Appraisal in Older Women's Quality of Life, Res Nurs Health, 23 (1), 25-34, 2000
- 9) 高山智子, 浅野祐子他: ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚と精神健康に及ぼす影響, 日公衛誌, 46 (11), 965-976, 1999
- 10) Lutgendorf SK, Vitaliano PP, et al. : Sense of coherence moderates the relationship between life stress and natural killer cell activity in healthy older adults, Psycho Aging, 14 (4), 552-563, 1999
- 11) Troy B.Adams , Janet R.Bezner , et al. : Conceptualization and Measurement of the Spiritual and Psychological Dimensions of Wellness in a College Population , Journal of American College Health, 48, January, 165-173, 2000
- 12) N.Skirka : The Relationship of hardiness, sense of coherence, sports participation, and gender to perceived stress and psychological among college students, J Sports MED PHYS FITNESS, 40 (1), 63-70, 2000
- 13) 本江朝美, 川口毅: 看護学生の体験学習に対する意識と行動と Sense of Coherence との関連に関する研究, 昭和医学会誌, 63 (2), 130-141, 2003
- 14) 岩井淳, 山崎喜比古: 健康生成モデルと中心概念 'Sense of Coherence', 保健医療学論集, 8, 54-61, 1997
- 15) 山崎喜比古, 吉井清子監訳: 健康の謎を解く- ストレス対処と健康保持のメカニズム, 5章 SOC は生涯どのように発達するか, 103-148, 有信堂, 2001, 東京
- 16) 山崎喜比古, 吉井清子監訳: 健康の謎を解く- ストレス対処と健康保持のメカニズム, 2章 「首尾一貫感覚 SOC」とは何か, 19-39, 有信堂, 2001, 東京

2. 対人関係スキルについて

— 子どもをとりまく社会環境の変化と対人関係— 内山 絢子

近年、青年期に至るまでの若者が、さまざまな対人関係スキルを欠いているとの指摘がなされている。核家族化・少子化などで家庭内においても接触する人数が減少していることに加え、地域社会でも子どもが群れて遊ぶことが少なくなっている。また、学校においても、少子化や学校選択性などの採択により、生徒数の学校間格差も広がり、生徒数の少ない学校においては、従来でも同世代集団が多数存在する学校でしか体験できなかった「多人数での集団経験」や「異年齢集団の交流」が、学校においてすら経験できなくなりつつある。さらに、パソコンの出現、さまざまなテレビゲームの出現や携帯電話やメールの出現は、仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）の世界と現実の世界との境界をあいまいにし、生活の場での規範感覚をあやふやなものにし、人間社会の規範を希薄にしている。こうした最近の子どもをとりまく社会的状況は子ども達に、生身の人間とのふれあいの機会を少なくさせ、人とのかわりを学ぶ機会を著しく減少させることにつながっていると考えられる。

従来、対人関係に関するスキルは、特に学習の機会を設けるまでもなく、成長の過程で発達課題を達成していく中で獲得されていったと考えられる。しかしながら、近年、ケイタイやメールなど新たな通信手段が出現するに伴い、従来の人間関係の中で伝統的に培わ

れてきた人とつきあうためのさまざまなスキルが獲得されないうまま成長することが多くなったのではないかと考えられる。この数年間に実施された調査のいくつかは、社会環境の変化を子どもがどのように受け止めているかを示しているものでそのいくつかを紹介して見よう。

1) 携帯電話所持が中学生の生活に及ぼす影響

「中学生とメディアの接触」(モノグラフ・中学生の世界 vol.71 ベネッセ教育研究所)¹⁾は、2001年10-12月に、東京・千葉・埼玉の中学生約2000名を調査対象者として、中学生のメディアと接触を10年前(1990年)と比較し、特に中学生の携帯電話使用が中学生の生活に及ぼす影響について調査をした結果を示している。

(1) メディア接触の変化

メディアとの接触の変化は表1に示すとおりである。テレビ・音楽・マンガ・雑誌との接触については、10年間で大きな変化は見られないが、新聞は大幅に減少し(約20ポイント)、テレビゲームは大幅に増加している(約20ポイント)。

表1 メディアとの接触

メディアの種類	1990年	2001年
新聞を読む	80.2%	60.1%
テレビを見る	97.0	98.5
音楽を聴く	88.6	88.5
マンガを読む	86.7	86.5
テレビゲームをする	41.4	60.1
雑誌を読む	78.7	74.5

(2) 携帯電話の影響

調査時点における中学生の携帯電話の所持率は対象者全体では37.6%であるが、学年があがるにつれ所持率は高くなる。また、携帯電話は、所持しているか否かによる差異よりは、長時間(月額2500円以上)使用するか否かで生活態度や価値観が異なっていることが示されている。つまり、携帯を長時間使用する中学生は、遅刻・授業中の居眠り等生活の乱れが約半数に見られ、「コツコツやるのはバカバカしい」、「人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」、「将来より今を楽しみたい」等の意見を肯定する割合が他の群に比べ高い。また、家族に対して、「悪いことをしてもきちんと叱れない」「親の生き方はつまらない」等批判的である。

2) 逸脱行動に関する世論調査

内閣府大臣官房政府広報室が平成13年に実施した「少年非行問題等に関する世論調査」²⁾においては、少年自身の問題として、「自己中心的である」、「自分の感情をうまくコントロールできない」、「人の痛みを感じない」、「人付き合いがうまくできない」等対人関

係に関する内容が上位を占めており、これらの訓練の必要性を感じさせている。紙数の関係で詳細は割愛する。

3) ライフスキルとしての対人関係スキル

(1) よい聞き手になるために

近年のIT革命による社会の変化は、好むと好まざるとにかかわらず若者にさまざまな影響を及ぼしていると考えられるが、それ以前からも人間関係をスキルとしての学習しようという試みがなされている。

R. Nelson-Jones は、Human Relationship Skills (思いやりの人間関係スキル)の必要性を説いている³⁾。ここでは、ネルソン=ジョーンズの方法を簡単に紹介しよう。彼は、思いやりを、「人間関係において、自分とほかの人、両方を肯定しようとする」と定義した。思いやりの対象は、自分自身、配偶者、友達、子ども、隣人、敵、人類一般を想定している。これらの人々に対して、好ましい人間関係を構築するためには、話し手を肯定する、相手を知る、自分自身を知る、人間関係における信頼と安定を築く、相手との差異(年齢・性別・文化などの)に橋を架けることができるなどの理由から「報酬を与える聞き手」になることが第一である。このためのスキルとして、9つのスキルをあげている。

- スキル1 自分と相手の違いを知る
- スキル2 尊敬と受容の態度を身につける
- スキル3 ボディメッセージを上手に送る
- スキル4 音声メッセージを上手に送る
- スキル5 「きっかけ」「小さな報酬」「オープンクエスチョン」を使う
- スキル6 語句を言い換える
- スキル7 感情を理解し、それを相手に伝える
- スキル8 感情と理由を理解しそれを相手に伝える
- スキル9 禁止事項を避ける

(2) 感情表現の困難さ

さまざまな感情の表出・表現をする時、また相手の感情を理解しようとする時、状況によっては困難さの内容が異なることがある。ネルソン=ジョーンズは、人間関係の中で、表現するのが難しいのは「人の偉さを認めること」、「愛情を表現すること」、「賛辞を受けること」などの肯定感情だとしている。また、感情表現には男女による得手不得手があり、男性・女性それぞれに表現しにくい感情は以下のとおりだという。男性にとっては、「傷つきやすさに関連した感情」、「感じやすさに関連した感情」、「子どもの愛情に関連した感情」が、女性にとっては、「野心に関連した感情」、「リーダーシップに関連した感情」、「主張性に関連した感情」の表現が難しいとしているが、これらは伝統的な男女別役割分担と関連する領域であり、男女それぞれが日常的に経験することが少ない感情と考えられる。

また、「価値がないという感情」、「能力がないとい

う感情」,「魅力がないという感情」など否定的感情は、聞き手が秘密を打ち明けられない場合には表現が難しいとしている。

(3) 基本的スキル——自己を知る
対人関係の中で、さまざまなスキルがあるが、その中で最も基本的と考えられるのは、自己を知ることであろう。他人を理解するためにはまず自分を知る必要がある。今回の調査においては、最も基本的な「自己を知るための項目」の中から、9つの項目を調査項目とした(表4)。

文 献

- 1) 中学生とメディアの接触.モノグラフ・中学生の世界.ベネッセ教育研究所. 2002 ; 71.
- 2) 内閣府大臣官房政府広報室編.月刊 世論調査 2002. 34-7
- 3) R.ネルソン=ジョーンズ思いやりの人間関係スキル(相川 充訳) 誠信書房.1993.

3. 学校におけるライフスキル教育

竹井 操

1) 公衆衛生運動の国際的潮流とわが国の健康づくり運動

1986年、オタワ開催のWHO国際会議は、第1回HP (health promotion) 会議といわれ、「オタワ憲章」にヘルスプロモーションの考え方が提唱された。

ヘルスプロモーションの定義は、「人々がみずからの健康をコントロールし、改善するプロセス」である。オタワ憲章は、①～⑤のプロセスを柱にしている。

- ① 健康のための政策づくり
- ② 健康を支援する環境づくり
- ③ 地域活動の強化
- ④ 個人技能の開発
- ⑤ ヘルスサービスの転換

1994年、WHOから、前述の④個人技能の開発にかかわるものとして「学校教育におけるライフスキル教育のガイドライン」を提唱した。これには、5類型10項目のスキルがあげられている。

- 《I》 -① 意志決定スキル
-② 問題解決スキル
- 《II》 -① 創造的思考スキル
-② 批判的思考スキル
- 《III》 -① コミュニケーションスキル
-② 対人関係スキル
- 《IV》 -① 自己認識スキル
-② 共感スキル
- 《V》 -① 情動対処スキル
-② ストレス対処スキル

1997年、保健体育審議会(当時文部省)は、「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興の在り方」答申で、「生涯にわたる心身の健康に関する教育・学習の充実」にふ

れ、「21世紀に向けた健康の在り方」では、「.....健康を実現し、さらに活力ある社会を築いて行くためには、ひとびとが自分の健康をレベルアップしていくという不断の努力が欠かせない。WHOのオタワ憲章(1986)の.....(中略).....ヘルスプロモーションは、健康の実現のための環境づくり等も含む包括的な概念であるが、今後とも時代の変化に対応し健康の保持増進を図って行くため、ヘルスプロモーションの理念に基づき、適切な行動をとる実践力を身に付けることがますます重要になっている。」としている。

このような考え方は、2000年11月「健やか親子21」第1課題:「思春期の保健対策と健康教育の推進」にも取り込まれ、教育現場の実践を促してきた。

2) スキルトレーニングの教材-ワークシート

ヘルスプロモーションの理念は、真の健康づくりは政策づくりや環境づくり等が広範に含まれ、さらなる論議のすり合わせから実現可能になると考える。

「健康は自ら創りあげていく」は、「自己責任のみに委ねる」の意味でなく、当然、思春期の子どもたちに対しての具体的支援を伴って実現可能である。

しかし、個人の望ましい生活習慣の確立および個としての自立を目指す視点から、自分を客観的に評価してみることは、「生きる力」を培うことにつながる。

2000年筆者は“自分探しの旅”途上の高校生へのスキルアップに役立つ、「自分の器量を知るためのドリル」(学習教材)の考案を試みた。前述の「学校教育におけるライフスキル教育のガイドライン」の10項目それぞれに、それを説明する文言を付けて提示し、各自の到達レベルを5段階で自己評価することを生徒に実習させたものである。

学習主題が“ライフスキルってなあに”であり、生徒のライフスキル・レベルを把握するための調査として行うものでないため、結果集約を行っていない。しかし、生徒は、「ドリル型式で面白い」「真面目に取り組めた」「今後、何度も、見直しドリルをやってみたい」等の感想を述べている。

10項目を①と②で分け、5項目ずつ別のグループ(第1グループ・第2グループ)とした。この配慮は、生徒が取り組み易い(判断しやすい)と考えたからである。時間があれば、ワークシートにより2つの5角形のプロフィールづくりをし、比較してみる狙いもあった。

【学習主題】 ” ライフスキルってなあに”

【設問】あなたは、次のライフスキルに関して、それぞれの能力が、どの程度身に付いていますか? 5段階の評価で自己採点してみましょう。

【評価の目安】

文献

+2	十分に備わっていると思う
+1	少々、自負できると思う
0	まあまあ、身に付いていると思う
-1	少し、不足していると思う
-2	おおいに不足していると思う

〔第1グループ〕

《I》-① 意志決定スキル

いくつかの選択肢の中から最良と考えられるものを自分で選択できる能力

+2 +1 0 -1 -2

《II》-① 創造的思考スキル

情報を組み合わせて独創的な計画や物などを作り出すことができる能力

+2 +1 0 -1 -2

《III》-① コミュニケーションスキル

言語及び非言語によって自分を表現できる能力

+2 +1 0 -1 -2

《IV》-① 自己認識スキル

自己のモラルや価値観、性格、長所、短所、好き嫌いなど行動を規定している要因について認知できる能力

+2 +1 0 -1 -2

《V》-① 情動対処スキル

喜怒哀楽の感情がどのようにして行動に影響するかを認識し、感情に適切に対処できる能力

+2 +1 0 -1 -2

〔第2グループ〕

《I》-② 問題解決スキル

重要な問題を的確に発見し、それを解決するあらゆる方法を考え、最適な方法を選択し、どのようにしてこれを実現出来るかを計画する能力

+2 +1 0 -1 -2

《II》-② 批判的思考スキル

情報や経験を客観的な方法によって分析することができる能力

+2 +1 0 -1 -2

《III》-② 対人関係スキル

他の人と積極的な方法で関わり、親しい関係を継続できる能力

+2 +1 0 -1 -2

《IV》-② 共感スキル

他の人の考えや主張について自分も全く同じように感じたり、理解したりすることができる

+2 +1 0 -1 -2

《V》-② ストレス対処スキル

ストレスとその影響を認識し、ストレスの解消を図るため、ストレス対処が適切にできる能力

+2 +1 0 -1 -2

1) WHO,学校の教育におけるライフスキル教育のガイドライン, 1994

4. アンケート調査結果

1) 調査方法および内容

15歳~25歳の男女を対象に、インターネット経由のアンケート調査を行った。オンライン調査業者を通じ、全国およそ15万人のモニターから年齢を指定した男女1350名をランダムに選び、電子メールによる依頼を行った。回答はWebページを通して寄せられ、無回答は生じないように設計された。15~17歳, 18~21歳, 22~25歳それぞれ100名ずつ男女同数を目安に、回答のあった先着355名を集計対象とした。

調査内容は、EPSI(エリクソン心理社会的段階目録検査)¹⁾を中心に、前年度調査²⁾の内容をほぼ踏襲し、比較可能なものとした。新たに加えた項目は、SOC13項目および対人関係スキル9項目の尺度である。EPSI検査項目については、文献1)または2)を参照されたい。調査時期は、2004年2月であった。

2) 対象のプロフィール

男女年齢別内訳は15~17歳が男性62人・女性64人, 18~21歳が男性60人・女性54人, 22~25歳が男性57人・女性58人の合わせて男性179人・女性176人であった。年齢区分は、ほぼ高校生年齢、ほぼ大学生年齢、それ以上を目安とした。

全体の68.7%が学生で男女の割合に差はなかった。既婚率は男性1.7%・女性8.5%で、子どものいる男性は0.6%、女性6.2%であった。回答者の住んでいる地域は全国28都道府県に渡っていたが、最も多い回答は東京で20%を占めていた。

以下の分析では、年齢・EPSI得点の3群および4群間の比較において、尺度変数の項目についてはKruskal-Wallisの順位和検定で、対比較はScheffeの方法で行った。それ以外はT検定もしくは χ^2 検定で行った。以下「差がある」とした項目は、危険率5%以下で有意な差があることを示す。

3) EPSI得点年齢別・性別集計結果

EPSI得点平均値を年齢区分別に表2に示した。15~17歳をA群, 18~21歳B群, 22~25歳をC群とすると、合計得点ではA群111.93, B群115.77, C群124.18と年齢に従って増加しており、3群間に有意な差が認められた。8つの尺度別では、同一性・親密性・統合性を除くすべてで3群間に差が認められた。対比較でみると、合計得点では、C群がA群に比べ有意に高かった。尺度別では、A-B群間では差がなかったが、A-C群とB-C群の間では差が認められ、C群はA群に比べ信頼性・自主性・勤勉性・生殖性におい

て、B 群比べ自律性・自主性・勤勉性において平均値が有意に高かった。

表 2 の性別では、合計得点平均値は男性 116.72、女性 117.55 で有意な差はなかった。尺度別に見ると、親密性で男性 15.47 に対し女性 16.65、統合性で男性 14.78 に対し女性 15.73 となっており、いずれも女性の得点が有意に高かった。一方、生殖性では男性 12.85 に対し女性 11.52 で、男性の得点が有意に高かった。

EPSI 得点平均値を前年度調査で得られた 25～54 歳 635 件と合わせ、15～54 歳の推移をみた (図 1, 図 2)。なお、10 歳区切りの 4 群とするため、本年度サンプルからは 25 歳を除き 15～24 歳 322 件を集計対象とした。合計得点平均値は年齢の低い方から男性 116.99, 125.71, 122.65, 129.49, 女性 116.49, 121.05, 125.45, 130.99 となっており、4 群間では、男女ともに有意差が認められ、EPSI 得点ほぼ加齢に伴い得点が上昇していた。

尺度別にみると男性では、同一性・親密性・統合性を除くすべての尺度で、女性では親密性・統合性をのぞくすべての尺度で有意差が認められた。図から分るように、男女共に加齢に応じて直線的に上昇が見られた尺度は、自律性・勤勉性・生殖性であった。女性においては、自主性・同一性についても直線的に上昇が見られた。

4) SOC (Sense of Coherence) および対人関係スキル尺度の平均値および EPSI との相関

SOC (Sense of Coherence) は 29 項目のスケールであるが、今回使用したものは 13 項目の縮約版で、山崎らの作成した日本語版である³⁾。その採点法は 7 件法で、13 項目中、4) 5) 6) 8) 9) 11) 12) 13) の質問は回答した番号をそのままに点数にし、1) 2) 3) 7) 10) の質問では回答した番号を逆にしたものゝ点数にし (1 なら 7 点, 2 なら 6 点…、7 なら 1 点)、全ての点数の合計を求めたものが得点である。一般の人々の平均は 54～58 点あたりにあるとされる⁴⁾。

対象の SOC 得点全体の平均値は 49.1 であった。年齢別では、A 群 (15～17 歳) 46.37, B 群 (18～21 歳) 49.89, C 群 (22～25 歳) 51.30 と加齢に伴い得点が高くなっており、3 群間に有意な差が認められた。項目別では 13 項目中 7 項目において、3 群間で有意な差が認められた。また、これら 7 項目の対比較では C 群が A 群に比べ、有意に値が高かった。A-B 群間では、項目 8 および 13 では B 群が A 群に比べ値が高かったが、B-C 群間では差がなかった。(表 3)。

対人関係スキル 9 項目は 4 件法で、「よく当てはまる」3 点、「かなり当てはまる」2 点、「あまり当てはまらない」1 点、「全く当てはまらない」0 点とした。

対人関係スキル得点は全体の平均値が 16.04 であった。年齢区分別に平均点をみると A 群が 15.44, B 群が 16.34, C 群が 16.38 と加齢に伴い得点が高くなっていったが、有意差は認められなかった。項目別にみる

と「7.相手と一緒に解決策と見い出そうとする」で 3 群間に有意差が認められ、加齢に伴い得点が高くなっていった。しかしその他の項目では、必ずしも加齢と共に増加しておらず、9 項目中 4 項目は 18～21 歳の群の得点が最も高かった (表 4)。

以上のように、SOC および対人関係スキル尺度の得点を年齢区分別にみると、平均値は全体としては加齢に伴い上昇しているが、項目別にみると、必ずしも直線的に増加する項目ばかりではなかった。

EPSI 得点と SOC 得点との相関係数は 0.792, 対人関係スキルと EPSI は 0.591 であった。EPSI の各尺度ごとの得点と SOC との相関では、同一性 0.649, 自主性 0.610, 信頼性 0.601 が高い値を示した。EPSI 各尺度と対人関係スキルでは、親密性が 0.546 と最も高く、統合性が 0.361 と最も低かった。生殖性との相関は SOC が 0.482, 対人関係スキルが 0.448 であった (表 5)。

5) 20 歳未満の EPSI 得点高低別集計結果

次世代育成観についてのデータとして、今回新しく得られた年齢層である 20 歳未満の対象 177 人について、EPSI 得点の高低別に検討した。EPSI 得点 48～99 の 56 人を L 群, 100～122 の 62 人を M 群, 123～195 の 59 人を H 群として、3 群の比較を行った。

(1) 20 歳未満のプロフィール

男女比は 88 人と 89 人と同じで、群別でも男性 L 群 27 人・M 群 29 人・H 群 32 人、女性 L 群 29 人・M 群 33 人・H 群 27 人で男女比に差はなかった。平均年齢は 16.77 歳であった。群別の平均年齢は L 群 16.68 歳, M 群 16.95 歳, H 群 16.66 歳で 3 群間で差はなかった。94.9% が学生で、全員が未婚で、子どもがいる人はいなかった (表 6)。

(2) 結婚・子ども

「結婚するつもり」と答えた割合は、L 群 48.2%・M 群 67.7%・H 群 83.1% で、L 群の結婚の意思が他群に比べて有意に低かった。「結婚はしないがパートナーなら欲しい」は L 群 41.1%・M 群 21.0%・H 群 11.9% で、L 群が他群に比べて有意に高かった。

将来希望する子どもの数は、L 群 1.38 人, M 群 1.85 人, H 群 2.08 人で、L 群が他群に比べて有意に少なかった。子どもが「欲しくない」と答えた割合は L 群 32.1%・M 群 17.7%・H 群 5.1% で、L 群が H 群に比べ高かった (表 7)。

(3) 世代継承観

自分より上の世代からと下の世代への継承について 10 項目をマルチアンサーで尋ねた結果、否定的な内容の 2 項目で 3 群間の有意差があった。「4.親世代の考え方が理解できない」L 群 30.4%、M 群 19.4%、H 群 11.9% で、L 群の割合が H 群に比べ高く、「9.自分のことで精一杯で下の世代のことは考えられない」では、L 群 32.1%、M 群 14.5%、H 群 10.2% と L 群が他群に比べ高かった。(表 8)。

図1.EPSI平均点・男性年齢別（平成15年度調査+平成14年度調査）

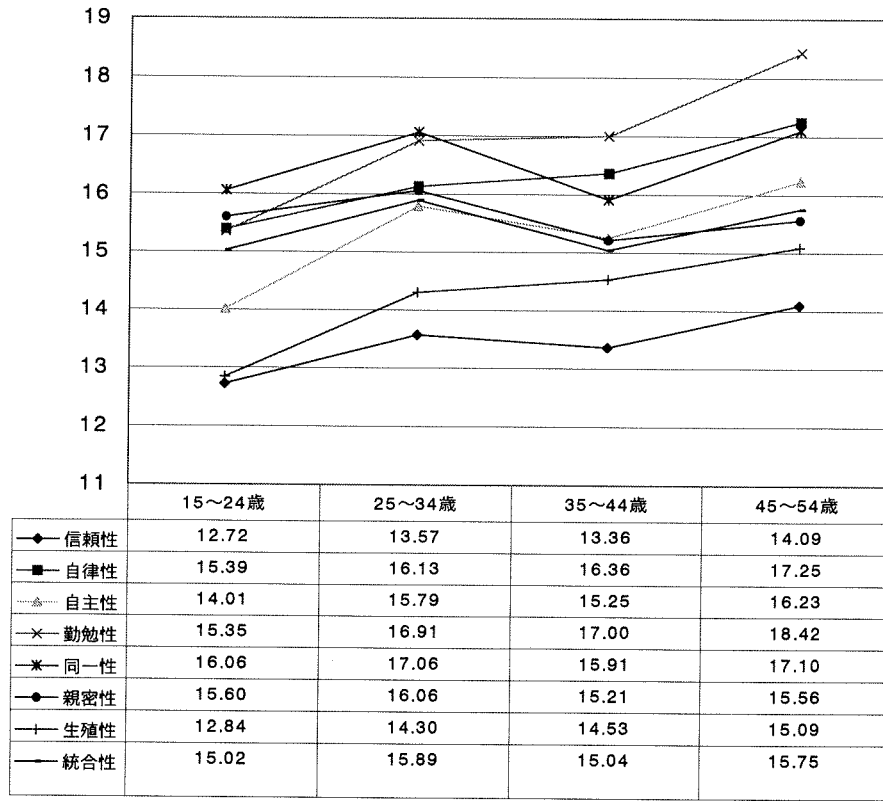
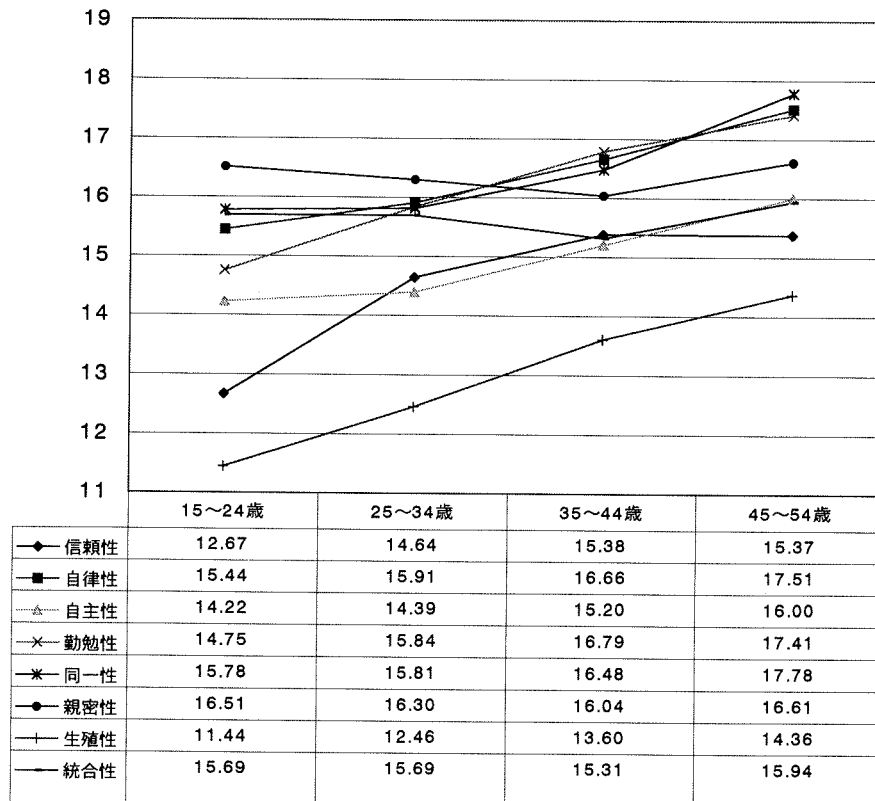


図2.EPSI平均点・女性年齢別（平成15年度調査+平成14年度調査）



(4) 人との交流・家庭環境

上・下・同世代との交流の機会の有無を4件法で設問した。「かなりある」3点、「少しある」2点、「あまりない」1点、「ほとんどない」0点として平均値を算出した。3群間の差をみると、上・下世代とでは差が見られなかったが、同世代とではL群2.50, M群2.73, H群2.93と有意な差が認められ、H群がL群に比べ、同世代との交流が有意に多かった(表9)。

「これまでに誰から世話を受けて成長したと思うか」の設問では3群間で有意な差は見られなかった(表10)。「人生において重要なことを教えてくれた人の人数」をあげてもらった設問では、L群3.52±3.04人・M群6.29±13.34人、H群4.54±3.08人と関連が認められなかった。

家庭については、家族の雰囲気、親の夫婦関係、子への接し方について「かなり当てはまる」3点、「少し当てはまる」2点、「あまり当てはまらない」1点、「全く当てはまらない」0点の4件法で設問した。「1. 家族の開放性」、「2. 父母は互いの個性を尊重していた」、「4. 父は私の話を聴いてくれた」、「5. 父は私を尊重してくれた」で3群間に有意差が認められ、これらは対比較でH群がL群に比べ得点が高かった(表11)。

(5) SOC得点および対人関係スキル

SOC得点はL群38.50±8.01, M群46.45±6.48, H群55.05±9.99, 対人関係スキル得点はL群13.00±4.09, M群15.4±3.34, H群18.4±3.37で、いずれも3群間で有意な差が認められた。対比較でもL群-M群, L群-H群, M群-H群の間すべてで有意な差が認められた。

(6) 調査結果の小括

EPSI, SOC, 対人関係スキルの各得点を年齢区別に検討した結果、各得点はほぼ加齢に伴い上昇していたが、項目別に見ると必ずしも年齢と正の関係にある項目ばかりではなかった。

EPSI得点とSOC得点、および、EPSI得点と対人関係スキル得点との相関は高く、EPSIの高得点群は、低得点群に比べ、SOCおよび対人関係スキルの得点が有意に高かった。

20歳未満のデータからは、EPSI高得点群は低得点群に比べ、結婚する意思のある割合が高く、希望子ども数が多い結果が得られた。これは20歳以上を対象とした過去の調査結果と同様^{2) 5)}であった。また、世代継承観ではEPSI低得点群には否定的項目を選択する割合が高かった。20歳未満においても、EPSI高得点群は次世代を育成しようとする傾向が認められるといえよう。EPSI高得点群の背景としては、20歳以上と同様、育った家庭の状況との関連が認められた。一方、20歳以上では関連が認められ、20歳未満で認められなかった項目には「これまで成長してきて世話になったと思う人について」があるが、年齢を重ねた後の振り返りの調査においては、世話に対する認知が高まる可能性が考えられよう。

文 献

- 1) 中西信男・佐方哲彦. EPSI-エリクソン心理社会的段階目録検査-上里一郎監修. 心理アセスメントハンドブック, 第2版. 2001.6; 西村書店, 365-376, . 2001.6; 西村書店, 365-376,
- 2) 宮原忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究(第3報)「次世代育成に関するアンケート調査」分析と総括. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 2003; 第39集: 151-168.
- 3) アーロン・アントノフスキー著, 山崎喜比古・吉井清子監訳, 健康のなぞを解く-ストレス対処と健康保持のメカニズム-, 東京, 有信堂高文社, 2001
- 4) 山崎喜比古・朝倉隆司編, 生き方としての健康科学[第三版], 東京, 有信堂高文社, 2003, 7
- 5) 宮原忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究(第2報)次世代育成に関するアンケート調査. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 2002; 第38集: 151-163.

IV. 結 語

調査結果から、次世代育成力は成人期以前から、すでに人格の成熟度と関連があることが示された。

縦断研究ではないので、発達の道筋を論ずることは出来ないが、人生の早い時期から差が生じる可能性があることは示されたと言えよう。成人期に期待される次世代育成力を獲得するために、それ以前の生活経験の蓄積が大切であることに違いないといえる。

そこで、若い世代に具体的にどのような環境や働きかけが有効であるかを探るために、ライフスキルに注目し、ストレス対処能力と対人関係スキルについて検討した。本稿 III-1-2) アントノフスキーの着想、で示されたように、SOC開発のきっかけとなった「健康を維持している一部の人の健康生成の営みとは具体的に何なのか」「何が人間の健康をつくっているのか」という健康生成の問いは、少子時代における次世代育成力の生成の問いに置き換えて考えることができるのではなかろうか。子どもを生み育てにくい社会環境にもかかわらず、次世代を育成しようとしている人々のもつ養育力の源とは何なのかを学び、次世代の人々へ継承していくことが大切である。

III-2で示したように、若い世代のコミュニケーションのあり方が変わってきている現在、例えば、III-3に示したように、対人関係スキル習得の援助を学校教育等の場で実施していくことは有意義である。さらに、EPSIの発達における家庭・地域環境の重要性を考えると、親や地域住民を含めた取り組みが望まれる。それが、生涯発達の視点から、あらゆる年齢層の次世代育成力を育てることに繋がるであろう。今後は親のEPSI, SOC, 対人関係スキルについて、子どもとの関連において調査を進めたい。

表2. EPSI年齢別・性別平均値

*p<0.05

	全体	A群 15~17歳	B群 18~21歳	C群 22~25歳	3群の順 位和検定	対比較			男性	女性	T検定
						A-B	A-C	B-C			
信頼性	12.79	11.98	12.89	13.57	*	*			12.70	12.88	
自律性	15.48	15.13	14.86	16.48	*		*		15.41	15.55	
自主性	14.24	13.59	13.68	15.50	*	*	*		14.13	14.35	
勤勉性	15.25	14.03	15.11	16.73	*	*	*		15.56	14.94	
同一性	15.88	15.31	15.95	16.43					15.82	15.94	
親密性	16.06	15.53	15.88	16.81					15.47	16.65	*
生殖性	12.19	11.52	12.13	12.98	*	*			12.85	11.52	*
統合性	15.25	14.84	15.28	15.67					14.78	15.73	*
合計	117.13	111.93	115.77	124.18	*	*			116.72	117.55	

表3. SOC年齢別平均値（7件法）

*p<0.05

	全体	A群 15~17歳	B群 18~21歳	C群 22~25歳	3群順位 和検定	対比較		
						A-B	A-C	B-C
1.*あなたは、自分のまわりで起っていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか [まったくない1~7とてもよくある]	3.67	3.44	3.83	3.75				
2.*あなたは、これまでによく知っていると思っていた人の、思わぬ行動に驚かされたことがありますか [まったくなかった1~7いつもそうだった]	3.90	3.80	3.87	4.04				
3.*あなたは、あてにしていた人に、がっかりさせられたことがありますか [まったくなかった 1~7いつもそうだった]	3.75	3.48	3.79	4.00	*	*		
4.今まで、あなたの人生には、明確な目標や目的が [まったくなかった1~7あった]	4.59	4.6	4.58	4.58				
5.あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか [よくある1~7まったくない]	4.03	3.71	4.24	4.17	*			
6.あなたは、不慣れな状況にいると感じ、どうすればよいかわからない、と感じることがありますか [とてもよくある1~7まったくない]	3.28	2.99	3.3	3.59	*	*		
7.*あなたが毎日していることは [喜びと満足を与えてくれる1~7 つらく退屈である]	4.32	4.16	4.42	4.4				
8.あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがあります [とてもよくある1~7まったくない]	3.54	3.14	3.75	3.77	*	*	*	
9.あなたは、本当なら感じたくないような感情をいだいてしまうことがありますか [とてもよくある1~7まったくない]	3.08	2.84	3.08	3.33	*	*		
10.*どんなに強い人でさえ、ときには「自分はダメな人間だ」と感じることはあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことがありますか。 [まったくなかった1~7よくあった]	2.76	2.74	2.67	2.87				
11.何かが起きたとき、ふつう、あなたは、[そのことを過大に評価したり、過小に評価してきた1~7適切な見方をしてきた]	3.99	3.94	3.93	4.09				
12.あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか [よくある1~7まったくない]	4.06	3.77	4.03	4.40	*	*		
13.あなたは、自制心を保つ自信がなくなることがあります [よくある1~7まったくない]	4.13	3.73	4.40	4.30	*	*	*	
合計	49.10	46.37	49.89	51.30	*	*	*	

註) 項目番号右の*印は逆転項目

表4.対人関係スキル年齢別平均値(4件法*)

*p<0.05

	全体	A群	B群	C群	3群順位 和検定	A-B	A-C	B-C
		15~17歳	18~21歳	22~25歳				
1.自分の感情を適切に表現されることができる	1.53	1.47	1.52	1.60				
2.自分の意見を相手に伝えることができる	1.60	1.56	1.56	1.68				
3.相手の言うことに耳を傾けることができる	2.15	2.10	2.20	2.15				
4.相手の言葉や感情を理解できる	2.04	2.01	2.04	2.07				
5.自分の感情をコントロールできる	1.74	1.63	1.82	1.79				
6.自分を否定的に見ないで、長所を見つけようとする	1.42	1.38	1.39	1.49				
7.相手と一緒に解決策を見出そうとする	1.86	1.70	1.92	1.97	*			*
8.あまり好きでもない人と一緒に仕事ができる	1.48	1.35	1.61	1.50				
9.上記にあげたような人間関係におけるスキルを上達させたい	2.23	2.25	2.29	2.14				
合計	16.04	15.44	16.34	16.38				

*「よく当てはまる」3点,「かなり当てはまる」2点,「あまり当てはまらない」1点,「全く当てはまらない」0点

表5.尺度間相関係数 Epsi・SOC・対人関係スキル

	信頼性	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性	生殖性	統合性	EPsi合計	SOC合計	対人合計
信頼性	1.000										
自律性	0.436	1.000									
自主性	0.467	0.662	1.000								
勤勉性	0.417	0.532	0.623	1.000							
同一性	0.511	0.641	0.609	0.570	1.000						
親密性	0.498	0.500	0.607	0.452	0.578	1.000					
生殖性	0.426	0.470	0.569	0.554	0.518	0.543	1.000				
統合性	0.468	0.463	0.435	0.492	0.650	0.505	0.445	1.000			
EPsi合計	0.681	0.772	0.811	0.763	0.836	0.770	0.741	0.731	1.000		
SOC合計	0.601	0.508	0.610	0.540	0.649	0.538	0.482	0.536	0.729	1.000	
対人スキル合計	0.418	0.450	0.466	0.463	0.453	0.546	0.448	0.361	0.591	0.432	1.000

20歳未満EPSI得点高低別集計結果

(L群：低得点48-99点, M群：中得点100-122点, H群：高得点123-195点)

表6.属性

*p<0.05

	全 体		L 群		M 群		H 群		3群 比較	対比較検定		
	n	%	n	%	n	%	n	%		L-M	L-H	M-H
全体	177	100.0	56	100.0	62	100.0	59	100.0				
1性別												
男性	88	49.7	27	48.2	29	46.8	32	54.2				
女性	89	50.3	29	51.8	33	53.2	27	45.8				
2年齢・平均±標準偏差	16.77	±1.33	16.68	±1.26	16.95	±1.29	16.66	±1.41				
3学歴												
1中学	37	20.9	13	23.2	9	14.5	15	25.4				
2高校	112	63.3	37	66.1	43	69.4	32	54.2				
3専門・専修	7	4.0	0	0.0	2	3.2	5	8.5				
4短大・高专	7	4.0	1	1.8	3	4.8	3	5.1				
5大学	12	6.8	5	8.9	4	6.5	3	5.1				
6大学院	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
7その他	2	1.1	0	0.0	1	1.6	1	1.7				
4同居人												
1父	152	85.9	50	89.3	52	83.9	50	84.7				
2母	168	94.9	55	98.2	57	91.9	56	94.9				
3兄	28	15.8	9	16.1	6	9.7	13	22.0				
4姉	40	22.6	13	23.2	14	22.6	13	22.0				
5弟	54	30.5	16	28.6	17	27.4	21	35.6				
6妹	53	29.9	16	28.6	22	35.5	15	25.4				
7祖父	22	12.4	7	12.5	9	14.5	6	10.2				
8祖母	44	24.9	9	16.1	15	24.2	20	33.9				
9配偶者	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
10子ども	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
11恋人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
12その他	4	2.3	1	1.8	3	4.8	0	0.0				
5職業												
1勤め人(常勤)	1	0.6	0	0.0	1	1.6	0	0.0				
2勤め人(非常勤・パート)	2	1.1	2	3.6	0	0.0	0	0.0				
3自営業	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
4会社経営	1	0.6	0	0.0	0	0.0	1	1.7				
5学生	168	94.9	51	91.1	60	96.8	57	96.6				
6専業主婦	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0				
7その他	5	2.8	3	5.4	1	1.6	1	1.7				

表7.結婚・子どもについて

	全 体		L 群		M 群		H 群		3群 比較	対比較検定		
	n	%	n	%	n	%	n	%		L-M	L-H	M-H
1.結婚の意志												
1結婚するつもり	118	66.7	27	48.2	42	67.7	49	83.1	*	*	*	
2パートナーなら欲しい	43	24.3	23	41.1	13	21.0	7	11.9	*	*	*	
3一生ひとり	5	2.8	2	3.6	3	4.8	0	0.0				
4その他	11	6.2	4	7.1	4	6.5	3	5.1				
2.欲しい子どもの人数												
1人	11	6.2	9	16.1	1	1.6	1	1.7	*	*	*	
2人	102	57.6	20	35.7	38	61.3	44	74.6				
3人	29	16.4	8	14.3	11	17.7	10	16.9				
4人	2	1.1	1	1.8	0	0.0	1	1.7				
5人	1	0.6	0	0.0	1	1.6	0	0.0				
欲しくない	32	18.1	18	32.1	11	17.7	3	5.1	*	*	*	
平均±標準偏差	1.78	±1.00	1.38	±1.13	1.85	±1.01	2.08	±0.67	*	*	*	

表8.世代継承観（重複回答）

*p<0.05

	全体		L群		M群		H群		3群比較	対比較検定		
	n	%	n	%	n	%	n	%		L-M	L-H	M-H
1 親や上の世代から伝えられる（物的）財産を大切にしたい	72	40.7	21	37.5	23	37.1	28	47.5				
2 親や上の世代から伝えられる「知的財産」や「生活の知恵」を大切にしたい	122	68.9	35	62.5	44	71.0	43	72.9				
3 親世代は自分達の事で精一杯で、我々世代への配慮が足りないと思う	19	10.7	10	17.9	6	9.7	3	5.1				
4 親世代の考え理解できない	36	20.3	17	30.4	12	19.4	7	11.9	*		*	
5 新しい時代には親世代の価値観は通用しないので、子どもは自分の価値観を作っていけばよい	59	33.3	21	37.5	15	24.2	23	39.0				
6 私にとって自分の子を生み育てることは大切なことだ	82	46.3	22	39.3	27	43.5	33	55.9				
7 自分の子に限らず次世代のために配慮したり世話をすることは大切なことだ	82	46.3	26	46.4	27	43.5	29	49.2				
8 子どもは次の時代の担い手だから、社会全体がもっと養育に責任をもつべきだ	82	46.3	28	50.0	27	43.5	27	45.8				
9 私は自分のことで精一杯で、次の世代のことを考える余裕がない	33	18.6	18	32.1	9	14.5	6	10.2	*	*	*	
10 現代は次世代育成より、高齢者問題が優先されるべきである	12	6.8	5	8.9	4	6.5	3	5.1				
11 その他	5	2.8	3	5.4	0	0.0	2	3.4				

表9.世代交流（「ほとんどない」0点～「かなりある」3点の4件法）

	全体		L群		M群		H群		3群比較	対比較検定		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		L-M	L-H	M-H
1 上の世代と交流	1.34	0.91	1.21	0.92	1.40	0.96	1.39	0.82				
2 下の世代と交流	0.95	0.97	0.77	0.91	1.02	0.91	1.07	1.06				
3 同じ世代と交流	2.72	0.64	2.50	0.85	2.73	0.60	2.93	0.25	*		*	

表10.これまで世話を受けたと思う人（重複回答）

	全体		L群		M群		H群		3群比較	対比較検定		
	n	%	n	%	n	%	n	%		L-M	L-H	M-H
1 父	140	79.1	42	75.0	48	77.4	50	84.7				
2 母	169	95.5	54	96.4	58	93.5	57	96.6				
3 祖父	78	44.1	24	42.9	28	45.2	26	44.1				
4 祖母	99	55.9	33	58.9	32	51.6	34	57.6				
5 きょうだい	73	41.2	24	42.9	20	32.3	29	49.2				
6 親戚の人	49	27.7	16	28.6	18	29.0	15	25.4				
7 学校の先生	71	40.1	24	42.9	22	35.5	25	42.4				
8 保育士・ベビーシッター	9	5.1	3	5.4	2	3.2	4	6.8				
9 友人	92	52.0	28	50.0	31	50.0	33	55.9				
10 同僚	9	5.1	4	7.1	4	6.5	1	1.7				
11 先輩	40	22.6	12	21.4	15	24.2	13	22.0				
12 その他	11	6.2	5	8.9	5	8.1	1	1.7				

表11.家族について（「全く当てはまらない」0点～「かなり当てはまる」3点の4件法）

	全体		L群		M群		H群		3群比較	対比較検定		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		L-M	L-H	M-H
1 私の育った家庭は自由に話し合える開放的な雰囲気だった	2.07	0.92	1.84	0.96	2.00	0.93	2.36	0.78	*		*	
2 私の両親は、お互いの考えや個性を尊重していた	1.82	0.89	1.53	0.99	1.85	0.80	2.07	0.79	*	*	*	
3 私の両親は仲がよい夫婦だった	1.99	0.94	1.84	1.00	1.95	0.89	2.18	0.88				
4 父は私の話に耳を傾けてくれた	1.81	0.96	1.50	0.97	1.77	0.88	2.14	0.94	*		*	
5 私は父に尊重されて育った	2.17	0.94	1.91	1.00	2.12	0.88	2.48	0.84	*		*	
6 母は私の話に耳を傾けてくれた	2.34	0.74	2.23	0.82	2.27	0.72	2.53	0.62				
7 私は母に尊重されて育った	2.53	0.66	2.46	0.73	2.48	0.62	2.63	0.61				